研究報告

大型猛禽類を教材とする環境教育に関する実践研究

― 道東に生息するシマフクロウ・オオワシ・オジロワシの授業実践を事例に ―

三崎 隆*・井盛 さゆり**・蛭田 眞一*
北海道教育大学釧路校* 横浜国立大学特殊教育特別専攻科**
(現横浜市立汐見台小学校)

A Study on the Environmental Education for Raptores: A case of elementary school's classes about Blakiston's fish owl, Steller's sea-eagle and White-tailed eagle in the Eastern Hokkaido

Takashi MISAKI*, Sayuri IMORI** and Shin-ichi HIRUTA*
Hokkaido University of Education, Kushiro Campus*
Yokohama National University**

(受理日2006年7月10日)

Key words: Blakiston's fish owl, elementary school's classes, environmental problem, Steller's sea-eagle, White-tailed eagle

1 研究の背景と研究目的

近年、学校教育においては、絶滅の危機に瀕している野生動物を扱った環境教育の実践が行われ始めてきている。一般的な絶滅危惧種を扱った事例として、マルチメディアを活用した教科横断的な環境学習として、生物がどのように環境に適応しながら生息しているかを調査し、その結果を基に絶滅に瀕している生物を救うためのディベートに取り組ませる中学校の授業実践(豊嶌 1999)や中学校の総合的な学習の時間におけるコース別課題研究として、絶滅に瀕する生物をテーマに、人類が動物に及ぼす影響や絶滅の危機にある生物についてコンピュータを活用して調べる授業実践(内藤 1996)が挙げられる。これらの授業実践は、絶滅危惧種に対する児童・生徒の認識を高める上では有効であろうが、絶滅危惧種の保全に対する判断力を高め、身近なところから保護活動に取り組もうとする意欲や態度を育てようと意図した場合には十分とは言えない。また、野生動物を扱った授業実践事例が少ない点、教材化が単なる絶滅危惧種の紹介に終始している点においても十分ではない。その意味においては、特定の地域に生息する絶滅危惧種の保全に貢献する環境教育を推進する上で授業改善の余地があると言える。特に、児童・生徒の絶滅危惧種の保護活動への意欲や態度の育成を考えた場合、当該児童・生徒の生活する地域に生息する絶滅危惧種を授業で取り上げる意義は大きい。

特定の地域に生息する絶滅危惧種を教材化した事例としては、メルボルン日本人学校における有袋類を教材化した副読本(文部省 1992, 88-89)や、北海道東部(以下、「道東」とする)に生息する絶滅が危惧されるゼニガタアザラシ(*Phoca vitulina*)を教材化した絵本(西尾 2004)があるが、今後の環境教育実践の改善に対する示唆を与

問い合わせ先 〒085-8580 北海道釧路市城山1-15-55 北海道教育大学釧路校 三崎 隆

える授業実践には至っていない。

本研究の調査地域である道東には、絶滅を危惧されている野生動物が比較的多く生息しており、大型猛禽類もその一つである。ただ、大型猛禽類は野生の個体を直接観察したり保護活動に参加したりすることがなかなかかなわず、その教材としての取り扱いが難しいだけに、身近な地域に生息する絶滅危惧種の一例として紹介される以外に授業実践に活用される有効な教材として取り上げられることはなかった。

そこで、本研究では、絶滅危惧種としての大型猛禽類の紹介だけで終わることなく、総合的な学習の時間の2単位時間とその後の道徳の時間の2単位時間による単元を構成し、総合的な学習の時間の第1時ではオオワシ（*Haliaeetus pelagicus pelagicus*；タカ目タカ科、絶滅危惧Ⅱ類（VU）；絶滅の危険が増大している種（環境省 2002））とオジロワシ（*Haliaeetus albicilla albicilla*；タカ目タカ科、絶滅危惧ⅠB類（EN）；ⅠA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種（環境省 2002））を取り上げ、第2時ではシマフクロウ（*Ketupa blakistoni blakistoni*；フクロウ目フクロウ科、絶滅危惧ⅠA類（CR）；ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種（環境省 2002））を取り上げながら、年々減少している現状や事故死の現状と原因について考えさせる指導を試みる。総合的な学習の時間と道徳の時間を関連させることによって、一人の人間の生き方を通して人間と野生動物との共存について考えを深めさせることが必要であると考えられるからである。このような環境教育実践の試みは、今後の絶滅危惧種の保全に貢献するばかりでなく、絶滅危惧種を扱う環境教育の授業改善に資するとともに、直接観察したり保護活動に協力したりすることの難しい大型猛禽類に対して児童・生徒が関心を高め、それらへの認識を深め、進んで保護活動に取り組もうとする意欲や態度をより一層育成する上で重要な意義を持つ。本研究では、この環境教育実践の有効性を明らかにすることを目的とする。

2 授業実践

2.1 対象者

北海道釧路町内T小学校第4学年1クラス29名を対象とした。当該校は、釧路湿原に隣接し、シマフクロウの生息地保護のため正確な生息地域は特定できないが、シマフクロウの生息地域内にある可能性が高い。

2.2 実践時期

平成14年9月

2.3 授業の視点

(1) 大型猛禽類と保護活動の実態把握の場

日本国内においては、オオワシ、オジロワシは北海道から本州北部で、シマフクロウは道東でしか見ることができない大型猛禽類として知られている（環境省 2002）。しかし、児童が、実際に毎日の生活の中で、それらに接し、直接体験できる機会はほとんどない。道東の中で自然環境に恵まれた場所に位置している授業実践校においては、児童に対しては、絶滅が危惧される大型猛禽類等の野生動物を身近に感じ、興味を持たせるとともに、それらを含めた多くの自然事象と接する機会を持つことが、野生動物との共存及び環境保全に対する児童の関心を喚起し、判断力を高め、身近なところから行動を起こそうとする態度を育成する上で重要であると考えられる。

そこで、授業実践に当たっては、シマフクロウ、オオワシ、オジロワシを実際に身近に接することができないため、実物に近い模型や分かりやすいモデルに置き換えて提示した。それによって、児童が大型猛禽類を身近に感じたり、愛着を持って理解したりするとともに、様々な驚きや発見、気付き等の心情を大切にし、豊かな感性が育まれることを意図したからである。

そして、大型猛禽類の保護活動に携わる人の生き方に触れさせる展開を試みた。実際に保護活動に取り組んでいる獣医師を取材したビデオを視聴させることによって、その生き方を通して、絶滅が危惧される大型猛禽類の保護活動について理解し，自分で考えようとする児童を育てることを意図したからである。

(2) 絶滅危惧大型猛禽類の減少と保護を考える話し合いの場

大型猛禽類が減少した原因や自然環境の破壊は、人間が直接的ではなくても、何らかの影響を間接的に与えている。このことについて理解し、少しでも自分たちで自然環境を守っていこうとする心情を高めていくことが重要と考えられる。そのために、道東に生息する大型猛禽類に対する興味・関心を高め、自分で考え、判断できるように促し、それらを保護するためには自分たちに何ができるのかを考えさせる授業実践が大切であると考える。

そこで授業実践に当たっては、人間生活の大型猛禽類への影響について、各時間ごとに話し合いによる交流を通して考えさせる展開を試みた。今までは気づかず当然と思っていた自分たちの生活が、実は大型猛禽類の個体数の減少に影響を与えていることに気付かせ、大型猛禽類との共存に向けて自分で実践的に行動しようと考えるようになることを意図したからである。

2.4 結果と考察

図1は本授業実践第1時の授業の展開を示している。第1時では、オオワシやオジロワシの体長や巣の重さを示したり、オオワシが年々減っていることをグラフで示したりしながら、児童のオオワシの生息環境に対する児童の認識を促した。その結果として、授業実践中に、大型猛禽類が年々減少している原因について、鉛中毒、環境破壊、交通事故などの意見を自分なりに述べる児童が現れた。また、授業実践後には、大型猛禽類の実際の大きさや環境破壊に驚いたり、人為的行為による大型猛禽類への影響に感想を持つ児童が現れた(表1)。

図2は授業実践第2時の授業展開を示している。第2時では、実際に保護されたシマフクロウをビデオで視聴させたり交通事故死の写真を見せながら、シマフクロウの生息環境に対する児童の認識を促した。シマフクロウのビデオを視聴した際には「檻にずっといてかわいそうだ」等の野生生物への思いを表現する児童が現れた。また、自分たちにはどのようなことができるのかという点について話し合う場面では、「看板をたてる」、「橋を作らなければよい」、「運転手が気をつける」、「呼びかける」、「スピードを出さない」、「フクロウは耳がいいから車が来たらビーッと鳴るようにすれば逃げると思う」、「橋に高い棒を立てる」という意見が出された。実現までは困難な内容ではあるが、各児童が自分の問題として身近な所から行動できることに取り組もうとする意欲を示し始めている様子を読み取ることができた。さらに、「お父さんに気を付けるように言えばいいのではないか？」、「でも、看板を立ててもマナーを守らない人がいると思う。」、「いくら呼びかけたとしても守らない人もいるのではないか。」等、自分たちの実生活への関連を思考した様々な意見交換がなされた。そのような中で、「自家用車は私たちが生活する上では欠かせないものであるから、シマフクロウのために乗らないのは無理だと思う」等、シマフクロウの生息する環境を守ろうとする考えと日常的に使用している自動車の利用との間で葛藤する児童も存在した。授業実践後には、シマフクロウの生息数の少ないことをかわいそうに思う感想やこれからの自分たちの生活への決意を抱く感想を持つ児童が現れた。(表2)。

総合的な学習の時間の2単位時間の実践を通して、一部の児童に対して、自分たちの地域に生息する絶滅が危惧される大型猛禽類に関心を持たせたり生態を理解させたりするだけでなく、自分たちの住んでいる地域の環境に目を向けさせ、その保全について考えようとさせることができたが、主体的な追究が認められるような変容を促すまでに至らなかったものと考えられる。

総合的な学習の時間の終了後に、道徳の時間を用いた関連授業を2単位時間実施した。道徳の時間の第1時では、総合的な学習の時間で取り上げた大型猛禽類の保護活動を行っている方の話を聞き、一人の人間の生き方を通して人間と絶滅危惧種との共存について考えさせた。授業終了後には、野生動物の生息環境の保全に対する考えを持ち始めたり、大型猛禽類の保護と自分たちの生活とのかかわりを考え始め、葛藤し始めたりする感想を書く児童が現れた(表3)。

道徳の時間の第2時では、シマフクロウの保護

1　単元名　野生生物と私たちの『共生』ーオオワシ・オジロワシ編ー
2　本時の指導
（1）目標：オオワシ・オジロワシについて知り、どうして減少しているのかについて考え、野生生物を保護する心、環境保護について考える
（2）準備：写真、絵、パソコン、スライド、プロジェクター、ワークシート
（3）展開

過程	学習活動	主な発問・指示	指導上の留意点	準　備
導入	オオワシが年々減っているのはなぜか？			
	1．本時の学習についてとらえる。	「今日は動物についての勉強をしたいと思います。」「R君が絵を描いてきてくれました。これは何の動物かな？」「オオワシだね、本物見たことある？写真も見てみよう。」	・ワシについて、児童に描いてもらった絵を見せ、何か当ててもらい、さらに数枚の写真を見せてどういうものか理解させる。	絵 写真
	2．ワシについて基礎知識をつける。（どういうものか）	「今日は先生がワシに関するクイズを作ってきました。スライドを見ながら答えてね。」「説明しながら、解答します。」	・基礎知識をつけるため問題を5問用意。 ・パソコンを使いながら説明し、解答する。 ・児童にはワークシートへの記入を促す。	ワークシート パソコン、スライド
	3．グラフを見せて、本時の課題に結びつける。	「このグラフは何のグラフかな？縦、横軸は何をあらわしているのかな？」「これは、ワシの個体数の移りかわりについてのグラフだね。年々どうなっているのかな？」「減ってきているね。今日はどうして減っているのかについて考えたいと思います。」	・グラフをみて、ワシが年々減ってきていることについて理解できるよう支援する。	
展開	4．本時の課題	「どうしてオオワシは年々減ってきているのかな？予想をたててその理由も考えてみよう。」	・オオワシが減っている理由について考え、討論する。	
	5．討論	「予想した内容を発表してください。」「付けたしや反論も発表してください。」「このような理由でオオワシは年々減ってしまったんだね。」	・スライドを見せながらまとめていく。	
整理	6．本時のまとめ	「このように人間によってワシは傷つけられて減少してしまったんだね。」	・今日の授業のまとめ。	
	7．次回の内容について	「次の時間はどうしたらワシを保護できるか、私たちにもできる事について考えたいと思います。」	・次回の内容を説明する。	

図1　環境教育実践の第1時の展開

表1　第1時の児童の授業後の感想

・ワシの巣は250kgもあってビックリした。
・ワシの大きさがわかってビックリした。
・ワシ博士になれた気がして楽しかった。
・自分達の住んでいる所は動物にはとても住みずらい環境だった。
・環境が破壊されていてびっくりしました。どうして減ったのかわかった。
・鉛中毒はハンターが悪い。

1　単元名　野生生物と私たちの『共生』　－シマフクロウ編－

2　本時の指導

（1）目標：シマフクロウについて知り、死亡原因で一番多いのは交通事故であることを知り交通事故をなくすにはどうすればいいか様々な点から考える。それにより、自分達も直接シマフクロウを減少させている原因になっていることを理解する。

（2）準備：写真、絵、パソコン、スライド、プロジェクター、ワークシート

（3）展開

過程	学習活動	主な発問・指示	指導上の留意点	準備
導入	1．前回の復習とミニ知識。	「前回はワシについて勉強しましたが覚えていますか？」 「今日はまず本題に入る前に少しおもしろい、ワシ1羽の食物連鎖のつながりについてお話します。」	・ワシについて、年々減少している原因についてやったことを復習。 ・ワシの食物連鎖のつながりについて図を用いて説明。	絵 写真 図
	2．本時の学習についてとらえる。	「それでは今日やる野生動物は何だと思いますか？」 「今日はシマフクロウです。」	・シマフクロウに関することを言い、興味をもたせる。 ・基礎知識をつけるため問題を5問用意。	人形
	3．シマフクロウについて基礎知識をつける。 （どういうものか）	「今日もみんなの大好きなクイズの時間です。スライドを見ながら答えてね。」 「説明しながら、解答します。」	・パソコンを使いながら説明し、解答する。児童にワークシートへの記入を促す。	ﾜｰｸｼｰﾄ
	交通事故をなくすにはどうすればいいだろう？			ﾊﾟｿｺﾝ、ｽﾗｲﾄﾞ
	4．写真を見せて、本時の課題に結びつける。	「この写真は何を表しているかな？シマフクロウがどうしちゃったんでしょう？」 「これはシマフクロウが交通事故にあってしまった時の写真です。」 「実は死亡原因で一番多いのが交通事故死なのです。どうしたら交通事故をなくして絶滅の危機にあるシマフクロウを守っていけるか、今日はそれについて考えていきたいと思います。」	・写真を見てシマフクロウの死亡原因で一番多いのが交通事故であることを説明し理解させる。 ・本時の課題に結びつける。	
展開	5．本時の課題	「交通事故をなくすためにはどうすればよいだろうか？各自、考えてみてください。なぜそう思ったかも考えて記入してください。」	・シマフクロウの交通事故がなくなるためにはどうすればよいのか各自考える。	
	6．討論	「考えた内容を発表してください。なぜそう思ったのかもね。」「付けたしや反論も発表してください。」 「交通事故を防ぐために実はこういう取り組みを行なっています。」	・各自発表し、討論する。その中で実は自分達も直接シマフクロウを減少させている原因になっていることを理解させる。 ・スライドを見せながら取り組みについて説明していく。	
整理	7．本時のまとめ	「このように交通事故をなくすためのことを色々と考えたけれども、私たち一人一人にも直接シマフクロウを絶滅の危機にさせてしまった原因があるんだね。」	・今日の授業のまとめ。	
	8．次回の内容について	「次の時間はオオワシ、オジロワシ、シマフクロウの保護活動を行なっている人の取り組みについての授業をやります。」		

図2　環境教育実践の第2時の展開

表2　第2時の児童の授業後の感想

- フクロウは魚を丸飲みするなんてびっくりした。とても楽しかった。
- フクロウの数が100羽しかいなくて、かわいそうだと思った。
- 自分達は満足に生活しているけれども、フクロウや色々な動物が死んでいる。気をつけようという気持ちを持って生活しなければならないと思った。

表3　道徳の時間の1時間目の終了後の児童の感想

- 齋藤さんの苦労がわかった。そこまでして頑張ろうとしているから、私一人でもがんばらなくっちゃ。
- 齋藤さんはやさしいと思って感動した。
- 自分達が普通に生活していても、シマフクロウには悪いというようなことがわかった。
- 私達は何もしていないつもりでも、結構関わっていることがわかった。
- 人間が悪影響を与えていることがわかった。
- 人間が悪い。
- 自分達はいけないことをしている、でも、そうしないと生きていけない。

表4　道徳の時間の2時間目の終了後の児童の感想

- シマフクロウの環境を破壊してきたけれど、人々がその環境を今、直しているから増えてほしいと思った。
- シマフクロウを保護しても増えないと思ったけれども、保護すれば、しないよりはいいなと思った。
- 人とシマフクロウは半分半分がいいと思った。フクロウばかり考えてもだめだし、人間のことを考えすぎてもだめだと思う。
- シマフクロウは私達が保護してあげたら絶対増えると思う。でも、シマフクロウのことばかりを考えてもいけない。人間とシマフクロウは協力していかなければならないと思った。

表5　大型猛禽類に対する授業後の好感度

	大好きになった	好きになった	どちらともいえない	別に興味ない
オオワシ	16	8	3	2
オジロワシ	13	10	2	3
シマフクロウ	21	3	3	2

表中の数値は人数／29人、オジロワシは1名無回答

活動を継続して行っていくことによって個体数を増加させることができるのかについて話し合わせた。授業実践後には、シマフクロウの保護や人間とシマフクロウとの共存の視点から感想を書く児童が現れた（表4）。自分たちのこととして考えたり、絶滅危惧野生動物との共存についてより深く考えたりしようとする児童が一部に現れたことは、比較対象となる集団との比較を行っていないために厳密には結論付けられないが、道東においては、総合的な学習の時間を道徳の時間と関連させながら大型猛禽類を取り扱うことによって、人間と大型猛禽類の共存について考えさせるきっかけにできるのではないかと考える。その意味においては、道東の学校において大型猛禽類を取り上げる総合的な学習の時間と道徳の時間を関連させた環境教育の授業実践は意義あることと考えられる。ただ、本研究の授業実践によってすべての児童の心情を高め、積極的に保護活動に取り組もうという意欲を持たせるまでには至らなかった。授業実践中には、「餌を与えてもずっと与えるわけじゃないから増えない。」や「ケガをしたものを保護しても治るとは限らない。」等の意見を持つ児童が18名存在した。児童が日常的に関心を寄せることの難しい教材であるだけに、彼らに対して今後に持ち続けようとする問題意識を抱かせる上で、十分な教育的効果をもたらすことができなかったのではないかと考えられる。

総合的な学習の時間と道徳の時間のいずれもが終了した後に、児童に対して「これらの野生生物に愛着を持ちましたか？」と問うた。いずれの大

表6　「授業を受けてみていちばん心に残っていることは何ですか？」に対する回答

・シマフクロウやオオワシの保護活動やクイズ。 ・シマフクロウの交通事故や感電死とそれに対しての防ぐ取組。 ・これらの動物が絶滅の危機にあるところ。 ・斎藤さんがシマフクロウを守っているところ、手の怪我のビデオを見たこと。 ・オオワシの巣がすごく大きいことや映っているビデオを見たとき。 ・ワシの鉛中毒。

（29名が回答した中でそれぞれ１名ずつの回答を示している）

表7　「これらの絶滅の危機にある動物を守るために私たちに何ができると思いますか？」に対する回答

・電気を節約する。	・みんなで保護のための募金をする。
・木をなるべく切らないようにする。	・木を植える。
・動物の特徴を生かして保護してあげる。	・交通事故を増やさないように気を付ける。
・看板を増やす。	・気を付けるように家の人に言う。
・スピードを落としてもらう。	・お父さんに気を付けてと言う。
・もっと野生生物の住みやすい環境を作る。	・ぜつめつ公園を作るとか。
・できることをすればいい。	

（29名が回答した中でそれぞれ１名ずつの回答を示している）

型猛禽類に対しても、学級の半数以上の児童が「大好きになった」「好きになった」と回答している（表5）。このことは、事前に認識調査を行っていないために厳密には結論付けられないが、環境教育実践の授業において、大型猛禽類の生態等に驚きを感じている児童が存在することと考え合わせると、多くの児童が大型猛禽類に対して関心を寄せて好意的にとらえていることを示唆していると考える。

また、「授業を受けてみていちばん心に残っていることは何ですか？」と問うたところ、６名の児童が大型猛禽類に対する保護活動や、大型猛禽類の人為的な事故死について印象深くとらえていた（表6）。さらに、「これらの絶滅の危機にある動物を守るために私たちに何ができると思いますか？」と問うたところ、13名の児童が絶滅が危惧される大型猛禽類の保護に向けて、それぞれ様々な観点から自分達にできることについて考えていた（表7）。特に、「気を付けるように家の人に言う」や「お父さんに気を付けてと言う」は、身近な所から自ら行動を起こすことのできる取組への表現であり、一部の児童とはいえ、そのような判断を持ち得るに至ったことは、本研究における試みが当該児童の判断力を高揚させたと考える。変容に至った児童数が少ないために早急に結論付けられないが、本研究のような授業実践が行われてこなかったシマフクロウの生息地域内である可能性の高い学校における本研究で試みた環境教育実践は、少なくとも当該校の児童に対して身近な所から環境保全に対する行動を起こそうとするきっかけを作ることはできると考える。その意味においては、地域の特徴的な生態系を扱う環境教育を推進して教育的効果を高めていくためには、本研究のような環境教育実践が本単元で終わってしまうのではなく、この後も継続的に実施されることが非常に重要であり、今後当該校において全校体制で取り組んでいくことが求められよう。また、「ないと思う」と回答した児童も複数存在した。当該児童に対する追跡調査を実施していないため厳密には結論付けられないが、本研究の試みが当該児童に対して身近な所から実践的に行動しようと考えさせるに至らなかった可能性、及び絶滅の危機にある野生動物を直接的に守るための行為が自分たちにはできないと考えている可能性がある。前者の場合、本研究の試みが教師の主導した教材や指導過程によって実践されたことに依る可能性があり、今後、児童が自分の身近に存在する問題として自分たちで提起し、考えていくことのできる教育実

践を企画することが大切である。

3　まとめと今後の課題

本研究においては次の点を明らかにすることができた。総合的な学習の時間と道徳の時間の授業を関連させる授業実践によって、大型猛禽類に対して関心を寄せ、実践的に行動しようと考え始める児童や絶滅が危惧される大型猛禽類の保護に向けて自分達にできることについて考える児童が現れた。このことから、道東において絶滅が危惧される大型猛禽類を扱う環境教育の授業実践は、地域の特徴的な生態系を扱う環境教育を推進する上で有効的であることが示唆される。一方、本研究の試みによる教育的効果は一部の児童に限定されており、すべての児童の心情を高め、保護活動や環境保全に積極的に取り組もうとする意欲的な態度を形成できたものではなかった。このことから、シマフクロウの生息域内の可能性が高い学校においてさえ、本研究の試みだけでは十分な教育的効果を期待することが難しいことも示唆している。

現在、絶滅が危惧される野生動物が環境省によって多く指定されている。それらの個体を直接観察したりそれらの野生動物の保護活動に参加したりすることが難しい状況下であるだけに、それらを教材化した授業実践はそれぞれの絶滅危惧種を総花的に紹介するだけで終わってしまいかねない。道東のように絶滅危惧種が比較的多く生息する地域における環境教育実践は、効果的な教材化が難しく、十分な教育効果を期待することが難しいからこそ、早急に授業改善を図っていかなければならないものである。今後、大型猛禽類の生息する道東の小・中学校においては、総合的な学習の時間等を活用してオオワシ、オジロワシ、シマフクロウを積極的に取り上げ、本研究で試みたような環境教育実践を継続的に実施するとともに、当該校において全校体制で環境カリキュラムを構築し、計画的に環境教育実践を実施していくことが求められる。

また、本研究では、総合的な学習の時間において、シマフクロウの飼育個体の保護増殖を行っている釧路市動物園やシマフクロウの保護個体の治療を行っている釧路湿原野生生物保護センターへの施設訪問は実施できなかった。今後、本研究で試みた総合的な学習の時間における指導内容を充実させ、当該施設を訪問して保護活動の実際的な様子を学んだり、それらの活動を通して児童一人一人が自ら課題を設定して自ら考え、判断し、探究していくことのできる活動を行ったりして授業改善を推進することが必要である。そのような授業改善を図ることによって、児童に対して絶滅危惧種を通した環境保全への視点を持たせるきっかけを与えた本研究における成果がより一層効果的になり、より多くの児童の変容を促すことができるものと考える。

謝　辞

授業実践に当たり、釧路町立遠矢小学校板谷聖一前校長、丹羽憲正校長、小川寿美恵教諭には、多大なる御理解と御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

引用文献

環境省，2002，改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッド・データ・ブック－2　鳥類，財団法人自然環境研究センター，東京．

文部省，1992，環境教育指導資料（小学校編），大蔵省印刷局，東京．

内藤正規，1996，自ら学ぶ環境学習とメディア活用，佐島群巳・奥井智久編著「中学校環境教育ハンドブック」所収，46-50，教育出版，東京．

西尾有香里，2004，児童の動物に対する自然認識に関する研究－ゼニガタアザラシを事例として－，平成15年度北海道教育大学教育学部釧路校卒業論文．

豊嶌啓司，1999，中学3年Playback COP3（地球温暖化防止京都会議）－作品で提案しようぼくらにできるCO_2削減－，加藤幸次・魚住忠久編著「環境教育をめざした総合学習」所収，238-252，黎明書房，名古屋．